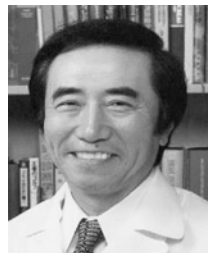


## 第50回日本胆道学会学術集会によせて



順天堂大学名誉教授、鶴川さくら病院名誉院長

有山 襄

私は恩師故白壁彦夫先生の指示で1960年代後半から肝胆脾の診断に携わるようになった。高山欽哉先生が世話人をなさった1966年東京で開催された第2回胆のう造影研究会に参加してから、胆道疾患に大変興味を持つようになった。胆道造影研究会、胆道疾患研究会、日本胆道学会と名称が変更されたが、ドイツおよびスウェーデンで放射線科助手として勤務したため、第6、7、8回の胆道疾患研究会を欠席した以外はすべての研究会と学会に出席してきた。

1986年8月日本胆道学会が設立されて、1987年から機関誌胆道が発行された。編集委員長は菅田文夫先生で編集委員は大井 至、斉藤洋一、鈴木範美、高田忠敬、田島芳雄、松本泰二の諸先生と私であった。編集委員会は数カ月に一度開催され、投稿された多数の優れた原著、臨床研究、症例報告の査読結果について熱心な討論が行われた。委員会終了後はグルメの菅田先生のご案内で素晴らしいレストランで美味しい食事をいただき、和気藹々の雰囲気でお話した。菅田先生が編集委員長を退任されて、1992年第6巻5号から私が編集委員長を仰せつかった。編集委員は大井 至、鈴木範美、須田耕一、高田忠敬、土屋幸浩、羽入富士夫、山川達郎の諸先生をお願いし、第8巻3号から跡見 裕、関 秀一、田尻孝、堀口祐璽先生に加わっていただいた。委員会後

は菅田先生に習って夕食会を企画して委員の先生方に喜んでいただいた。

1996年の理事会で初代の理事長に選任され、身に余る光栄と考え胆道学会の発展に貢献するため出来る限りの努力をする決心をした。2期6年間理事長を務めさせていただいたが、どの程度重責が果たせたか確信がない。

DDWには1993年の第1回から2000年の第8回まで参加し、財務委員長などを務めて胆道学会およびDDWのために努力した。しかし、第9回のDDW開催にあたってDDWの某役員から“胆道学会、膵臓学会はDDWに参加しなくてよい。両学会の独立性は疑問で消化器病学会に吸収されてもよい学会だ”との発言があった。胆道学会は緊急理事会を開き、胆道学会を誹謗する暴言を吐く者が役員DDWには参加を拒否することを理事全員で意見の一致をみた。膵臓学会の理事会でも参加拒否が決定された。2001年の第37回総会から胆道学会は独立して開催され、今日に至っている。

胆道学会は胆道疾患にとくに興味を持ついわゆる“オタク”の集まりであり、学閥やpower politicsに関係なく、自由で活発な討論が行われる場である。このような独自性を保ち、益々発展することを祈念する。

## 日本胆道学会理事長時代の思い出



愛知県がんセンター  
二村 雄次

私と胆道学会の接点は1971年の第7回胆道疾患研究会に初めて出席した時に始まり、1973年の第9回胆道疾患研究会で初めて一般演題でPTCにおける病変部圧迫法について発表、そして1977年の第13回研究会では経皮経肝胆道生検と経皮経肝胆道鏡検査というタイトルで研究発表をさせていただいて以来どっぷりとこの研究会に漬かってきた。

この研究会は1987年の第23回大会から「日本胆道学会」へと名称変更が行われると同時に学会誌「胆道」が創刊された。

一方、世界に目を向けると、国際胆道学会（International Biliary Association、IBA）は1979年5月に第1回の学術集会を開催しているの、日本の方が14年先輩である。胆道疾患に対する診断や治療など臨床面においては日本の進歩は著しく、西欧諸国よりも一歩進んでいるというのが学会員の共通した認識であった。21世紀に入ると、特に胆道癌領域ではその傾向は更に著しくなったようである。ちょうどその頃2002年9月に私は有山 襄先生の後を継いで日本胆道学会理事長の大役を拝命することになった。有山理事長の強いリーダーシップの下、学術集会をDDWとの共催で行ってきたものをDDWと縁を切って2001年（第37回二川俊二会長）より単独で開催するようになっていた。一方、2002年4月には第29回会長（1993年）の高田忠敬先生が第5回国際肝胆膵学会（IHPBA）を東京で開催するなど日本の胆道学は世界をリードするところまで成長していたように思える。そのような流れの中で、

私が理事長就任当時の日本の胆道学は globalism 真只中にあったように記憶している。そして2006年9月の第42回日本胆道学会学術集会（藤田直孝会長）での私の理事長講演の題目は「胆道学会の流れと国際化」として、胆道研究会、胆道学会、IBA、IHPBAの学術集会の歴史を紹介しながら、私個人がそれらの学会とどのようにつながってきたかを報告させて頂いた。あれからもう8年も経過したが、この globalism の流れは年々活発になってきた。2008年9月に近藤 哲教授に理事長の重責をバトンタッチすることができたが、近藤理事長はこの globalism の流れを更に加速して、学会誌「胆道」の優秀論文を Journal of HBP Science に secondly publication の道筋をつけるという難事業を完成させた。胆道学会としては既に理事長制が始まっていた10年前には考えられないような国際的な視野に立った学会へと発展して行った。そして日本の胆道外科医も胆道内科医も共に世界のトップグループを走っていることは世界中から認められている。

一方、学会誌「胆道」の編集では随分苦勞を味わった。現理事長の乾先生が編集委員長になられてから、大改革が行われた。ホームページの設立、出版社の変更、表紙の改変、ロゴマークの公募など大きく前進し、会員自らの力で自分達の雑誌を作り変えたという実感があった。近藤理事長が病に倒れて2年で辞任するという不幸に遭遇したが、学会貢献度 No. 1 の乾新理事長がその後の学会運営に辣腕をふるっていただけたのは幸運であった。